

女性と仏教

二宮由美

はじめに

本日私が論じる「仏教」とは、北伝仏教、特に『法華経』を中心経典とする大乘仏教に属するものです。また「女性」という観点では、社会あるいは思想の成熟度を測る尺度として、社会的弱者とされてきた子どもや女性に対する態度があげられます。したがって、その流れのなかで、「女性」がどのように捉えられていたか、その面を考察したいと思います。また、本日のシンポジウムのサブ・テーマにあるように、「現代から

の視点」から、仏教が女性に当てた光がどのように再生されているかをみてみたいと思います。

釈尊は、女性蔑視がはなはだしい古代インドの社会において、「男も女も成仏できる」としました。それは宗教的資格において男女差はないという宣言でした。しかしその後、仏教の制度化にともない、男性中心の教団運営がなされていく過程のなかで、その社会状況も加わり、女性蔑視の視点が盛り込まれていきます。

「女人五障説」は、紀元前後のインドの仏教教団で成立し、女性は「梵天王・帝釈・魔王・転輪聖王・仏」

にはなれないとするものでした。こうした女人不成仏という仏教思想の流れのなかで、北伝仏教、大乘仏教の系譜にある、十三世紀日本の日蓮は、『法華経』を依拠に新たな女人成仏論を提示します。

一 法華経の「改転の成仏」

『法華経』の一仏乘（一切衆生を等しく成仏させる教法）の思想は、すべての衆生が平等に成仏できるとする思想です。日蓮が女人成仏論の依拠としたのは、『法華経』の提婆達多品第十二⁽¹⁾です。ここでは、海の底に住む八歳の龍女の娘（龍女）が成仏したことが説かれていま

す。
ここで問題となるのは、成仏するのは、変成男子、つまり「忽然の間に」（瞬時に）男に変わった後の、「改転の成仏」であるという点です（「改転の成仏」とは、身を改め転じて成仏すること。女人が女身を改めて男子と変わって成仏すること）。

女人成仏の依拠である「龍女の成仏」における「改転の成仏」について、二つの点が指摘できます。一つ

釈尊は男女平等と説きましたが、『法華経』を依拠としながら女人成仏に関して新たな解釈を提示した日蓮は、「女性と仏教に関する姿勢は、鎌倉仏教の開祖のなかでもっとも進歩的⁽⁶⁾」と指摘されています。

一方、興味深いのは、日蓮の女人成仏論提示の底辺には、母への恩という人間としての普遍性があつたこととです。具体的には、「但法華経計りこそ女人成仏・悲母の恩を奉ずる実の報恩経にて候へと見候いしかば・悲母の恩を報ぜんために此の経の題目を一切の女人に唱えさせんと願す⁽⁷⁾」とあります。この点については、母に対する愛情と報恩が、日蓮の女人成仏論提示の原点であつたとの指摘があります⁽⁸⁾。

三 創価学会初代会長・牧口常三郎

近代日本の在家仏教団体・創価学会の初代会長であり、軍国主義の思想、宗教統制に反対し、獄死した牧口常三郎氏は教育者でした。日露戦争中、牧口氏が教育者として他の事業に優先して着手した仕事がありました。それは、彼が実質的な中心者となつて創立した、

は、中国の翻訳者が簡潔に「変成男子」と訳した箇所は、梵語から、中国の表現傾向に配慮してこの表現が用いられたという点です⁽²⁾。そしてもう一つは、宗教思想は本来、新しい文化創造の担い手となる力をもっているはずですが、実際には時代のもつ思想の制約からなかなか解放されないという点です⁽³⁾。

二 日蓮の「即身成仏」

十三世紀、日本の日蓮は、『法華経』の提婆達多品における「龍女の成仏」を依拠として、新たな解釈を提示しました。それは、龍という畜生界から仏界への、生命境界の転換という解釈です⁽⁴⁾。そして日蓮は、「妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらうべからず⁽⁵⁾」（妙法蓮華経の五字を弘める者は男女の分け隔てをしてはならない）とし、女性は女身のままで、即身成仏できることを提示しました。

「女人禁制」「女人不成仏」「穢れ」等の思想が根強かつた中世において、男女とも同じく救われるべき存在であると主張する日蓮の主張は、しごく当然なものです。

「大日本高等女学会」の仕事、つまり女性のための通信教育事業です。この事業の設立の理由として牧口氏は、「女学校は都市部に集中し、通学・費用の点で中流以下の民度に適していない。志をもちながら学問のときを逸して一生物学問の不足を嘆き、他人を羨むことになる者が多い。この問題は女性の将来のために、傍観できないことである⁽⁹⁾」と述べています。当時、男性に比べて中等教育の機会が少なかった女性に対して、適切な就学機会を提供し自立の能力を与えることが、設立の目的でした⁽¹⁰⁾。

牧口氏の「傍観できない」とは、他者の問題として放置できない、つまり他者の「苦」への「共感」「同苦」の行動であると考えられます。

四 三代会長・池田大作

関西創価学園（中学、高校）は池田大作氏によつて一九七三年に創立され、創立当初は女子校で、名称は関西創価女子学園でした。

開学時に女子生徒に与えられたモットーは、「健康・

良識・希望」であり、第一回入学式において、創立者である池田氏は生徒たちに、「君たちの一挙手、一投足が伝統をつくる」、つまり人の振る舞いが即伝統となっていくと指導しました。そして、「『他人の不幸のうえに自分の幸福を築くことはしない』という信条を培っていただきたい」と指針を示しました。この「幸福を築くことはしない」という、一見消極的にみえる態度は、実は断固とした精神性を有する態度であり、ソフト・パワーを代表するガンジー主義の非暴力の思想と共通項があります。そしてそれは、困難の様相を呈している文明間対話の共通承認事項として、その最大公約数となりうると考えられます。

日本の仏教世俗団体の指導者である池田氏が、女子生徒に提示したこの指針は、インドで生まれた釈尊の仏教を現代に再生させています。

五 インド創価池田女子大学

そして二〇〇〇年、インドにこの池田氏の名前を冠した女子大学が誕生しました。創価池田女子大学です。

この大学が掲げるモットーは、

人間に奉仕する慈悲と智慧の人たれ
 社会に貢献する勇気と正義の人たれ
 平和のために行動する哲学と信念の人たれ

です。このモットーは、仏教の理念を、現代において人間、社会、平和へと再生させたものです。建設にあたったクマナン氏によると、この大学では、言語、宗教、民族を超えた「多様性の調和」という、現代社会が最も希求しているテーマの一つを掲げています。そして、女子教育を通しての平和の創造と促進を、その役割としています。女子教育を通じて現代社会の抱える課題を克服するための、試みの開始といえます。

インドで生まれた仏教が北伝仏教として日本に伝わり、日蓮が中世において、また牧口氏が近代において、さらに池田氏が現代において、女性という観点で、時代に即した形で、仏教思想の再生を試みているといえます。さらに仏教は、その発祥の国インドにおいて、

「創価池田女子大学」という教育の分野で、現代から未来に生き続けます。

宗教がおかれた時代、文化の範囲内で、「女性」という観点から、最大限にその展開を試みている点を検討して参りました。仏教思想が、「女性」という観点から、様々にその時代に再生されていくダイナミックさは、その思想の深さの一端を垣間見せてくれます。

注

(1) 『大正新脩大藏経』第九卷、三四中～三五下

(2) 菅野博史、『法華経入門』、岩波新書、二〇〇一年、一五三～一五八頁

(3) 菅野博史、『法華経—永遠の菩薩道』、大蔵出版、一九九六年、一八四～一八七頁

(4) 小林正博、『日蓮の真実』、第三文明社、二〇〇三年、一三三～一四四頁

(5) 『諸法実相抄』、『日蓮大聖人御書全集』一三六〇頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』七二六～七二七頁

(6) 栗原淑江、「仏教史における女性の問題—日蓮の女人成仏論を中心に」、『東洋学術研究』第四十一巻第一号、二〇〇一年六月号、潮出版社

(にのみや ゆみ／東洋哲学研究所研究員)

(7) 「千日尼御前御返事」、『日蓮大聖人御書全集』一三二一～一三二二頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』一五四二頁

(8) 栗原淑江、前掲書

(9) 牧口常三郎、『大家庭』第三巻第一号、一九〇七年(東京大学法学部附属近代日本法政資料センター所蔵)

(10) 塩原将行、「牧口常三郎は女子教育の先覚者だった」、『潮』二〇〇一年六月号、潮出版社